子宮内膜症とリンパ腫により死亡したシシオザル (*Macaca silenus*) の

1 例

○植田 美弥^{1,2}, 東野 晃典¹, 野村 美佳¹, 緒形 倫子¹, 和田 新平² (¹(公財)横浜市緑の協会 よこはま動物園, ²日本獣医生命科学大学 病態獣医学部門)

A dead case of lion-tailed macaque (*Macaca silenus*) associated with endometriosis and lymphoma.

○ Miya Ueda^{1,2}, Akinori Azumano¹, Mika Nomura¹, Tomoko Ogata¹, Shinpei Wada²
(¹Yokohama Zoological Gardens, ²Department of Veterinary Pathobiology, Nippon Veterinary and Life Science University)

[目的] よこはま動物園で飼育していた雌のシシオザルがリンパ腫と子宮内膜症を併発した消化管の癒着により死亡した。リンパ腫と子宮内膜症の両者が消化管の著しい癒着を引き起こした珍しい症例と思われるため報告する。

[症例個体]症例個体は 25 歳のメスのシシオザルで、既往歴として 2015 年 12 月に胸部皮膚の由来不明の悪性腫瘍を摘出している。2016 年 8 月初旬に腹部膨満を認めたため、エコー検査を実施したところ消化管に多量のガスの貯留を認め、試験開腹を行った、しかし、消化管が全体的に腹膜等に癒着し腹腔内から取り出すことができず、そのまま閉腹した。その後腹部膨満は残るものの食欲回復したため、メトクロプラミド等の投与で様子を見ていたが、10 月下旬に削瘦が目立つようになり、11 月 1 日低血糖で意識混濁となった。その後一旦回復したが、食欲ほぼ廃絶となり 11 月 4 日死亡を確認した。

[剖検所見]肝臓はやや硬結感があり横隔膜に癒着。大網と腸管同士の癒着が顕著で、腹膜にも癒着。直結腸内に泥状内容物がありガスで充満。腸間膜リンパ節腫大。脾臓も癒着。子宮も腸管との癒着が激しく原型を留めていなかった。

[病理組織所見]肝臓内、十二指腸、小腸漿膜面から脾臓内、腸間膜、大腸に大小結節性に腫瘍巣が形成されていた。これらの腫瘍内ではやや大型核を有するリンパ球系の異形細胞が多数増殖しており、腫瘍細胞間にはしばしばマクロファージを混在していた。免疫染色ではこれらの腫瘍細胞はときに CD3 陽性を示し、CD20 は陰性であった。

膣の漿膜面では子宮内膜上皮で構成された腺管や嚢胞を伴いながら、子宮内膜間質が密から疎に豊富に増殖しており、マクロファージや形質細胞などの炎症細胞浸潤を伴っていた。同様の子宮内膜組織は消化管漿膜面や肝臓や脾臓の被膜表面において、間質細胞を主体に豊富に増殖し、消化管漿膜面では子宮内膜組織が腫瘍巣周囲を取り囲んでいた。

[考察] 腫瘍の浸潤・転移と子宮内膜症により腹腔内臓器、特に消化管が癒着しており、これが腹部膨満と食欲不振をおこし、死亡に至ったと考えられる。免疫染色の結果から本症例の腫瘍は T-cell lymphoma と判断された。原発巣は特定できなかったが、肝臓内では腫瘍細胞の脈管浸潤がしばしば観察され、肝臓は転移巣と思われた。